

# 常陸嶽理市

本名

藤田理一

ひたちだけ・りいち

ふじた・りいち

大相撲関取

## 経歴

生:明治33年(1900年)4月6日、広島県深安郡湯田村本湯野(現福山市神辺町湯野)生まれ

没:昭和33年(1958年)11月5日、享年59歳

大正2年(1913年)4月4日	14歳	広島県立福山中学校(誠之館)へ入学
大正5年(1916年)3月	17歳	広島県立福山中学校4年修了
大正6年(1917年)5月	18歳	初土俵
大正13年(1924年)5月	25歳	新入幕
昭和3年(1928年)1月	29歳	前頭2枚目
昭和5年(1930年)8月8日	31歳	日本郵船秩父丸で横浜を出航
昭和5年(1930年)	31歳	アメリカ西部地方において相撲の指導
昭和5年(1930年)10月	31歳	引退
昭和6年(1931年)5月	32歳	再度渡米、相撲の指導
昭和21年(1946年)	47歳	相撲協会理事

## 常陸嶽理市関 同窓生中唯一の角界人

誠之館同窓会顧問 森田雅一

大正13年(1924年)2月9日、福山市霞町所在の旧福山中中学校校長室を訪れたのは、東京出羽ノ海部屋に属する「常陸嶽理市」関であった。

同君は、去る1月場所において、東十両2枚目で5勝2敗の成績をあげ、来る五月場所では入幕確実という地位に達しており、この日、七年前に第四学年中退という形で別れをつげた母校の庭に立って、恐らく感無量の想いがあったことと思われる。

9日・10日の両日は、「東京角力」栃木山一行の福山興行が開催され、娯楽の少ない当時であって、多数の中学生の観戦が予想されていた。

常陸嶽関は本名藤田理一、明治33年(1900年)4月6日、深安郡湯田村湯野11(現福山市

神辺町湯野)の農業藤田関五郎・同ユキの4男として生まれた。

湯田尋常高等小学校尋常科を卒業して、大正2年(1913年)4月4日、県立福山中学校(誠之館)へ入学した。

当時の記録を見ると、郡部からの入学生は、平均各村1~2名位であり、またこの年の全合格者105名中、尋常科卒業生は、わずか10名であったことを見れば、藤田生徒の資質の優秀さは明らかであろう。

入学後1年余の通学方法は明らかでないが、大正3年(1914年)7月、両備軽便鉄道が府中・福山間に開通したため、その後は汽車通となった。

後輩達の回想によると、彼がその偉軀を窮屈に客車におしこみ、級友とともに通学する姿は、「少なからず恐ろしいもの」と感じられていた。

「その後、上級生の間には、猛烈に角力が勃興して、君を中心として、青山・榊原・国友等という猛者達が、校庭に土俵を描いてブツかったものですが、その熱心は遂に校長を動かして、中庭に立派な板葺きの土俵が出来上るまでになり・・・こうした上級生中の猛者が、『角力団』という会を作って横行闊歩していました。」[『福山学生会雑誌(第63号)』]

この角力団中、最も熱心に角力に取り組んだのが藤田生徒であった。

その熱が高じて、遂に、4年終了をまたず、両親の反対を振り切って上京、直ちに出羽ノ海部屋の門をたたいて入門した。

大正6年(1917年)5月初土俵。18才。

前角力番付外で7勝3敗であり、これ以後、大正13年(1924年)5月場所(25才)、東前頭13枚目で初入幕するまでの満7年間、軽量非力ともいふべき体軀を駆つての、意欲的・頭腦的な激しい稽古が続けられた。

入幕後、昭和5年(1930年)10月場所(31才)までの21場所、一度も落ちることなく幕内力士をつとめつづけたが、昭和5年10月場所全休後に引退した。

幕内成績は87勝129敗15休。金星3。

最高位は昭和3年(1928年)1月場所(28才)の前頭2枚目であった。

体格は、身長175cm、体重90kgの軽量であり、取り口は、左四つ・突っ張り・上手投げ・内掛け・外掛けを得意とした。

玄人筋の批評によれば、その出足の速さと俊敏な頭腦の閃きに特色があり、四つに組むことは少ないが、出足・突っ張り・足癖の戦法に、さわやかな興味があるといわれた。

昭和5年(1930年)5月場所後、現役のまま在米邦人相撲協会の招きに応じて渡米し、西部地方の邦人二世への角力の指導・普及につとめ、引退後の昭和6年(1931年)5月にも再度渡米しているのは、氏の抜群の指導力と人物に対する高い評価を物語るものといえよう。

土俵外の常陸嶽関は、明晰な頭腦と温厚な人柄をもって知られ、すでに下級力士時代にも師匠の秘書を務めた程であったが、引退後は、年寄「竹縄」を襲名し、後進を養成するとともに、相撲協会の諸役を歴任、昭和21年(1946年)以後、理事に推されて、武蔵川(元出羽の花)・秀ノ山(元笠置山)親方とともに、協会の発展に欠くことの出来ない人物であった。

昭和33年(1958年)年11月5日逝去。享年59才。

誠之館全卒業生中ただ1人の角界人として輝く常陸嶽理市関の名前を、われわれは永く忘れることはできない。

(参考:世良正明著『山陽力士伝』)。

大正13年ごろは年2場所制(1月、5月)で、昭和2年に4場所制となった。場所あたりの興行日数は11日。

出典1:『誠之館同窓会報(第4号)』、28頁、「常陸嶽理市関 同窓生唯一の角界人」、森田雅一、福山誠之館同窓会編刊、平成9年(1997年)3月31日

出典2:『福山学生会雑誌(第62号)』、147頁、福山学生会事務所編刊、大正15年7月12日

出典3:『福山学生会雑誌(第70号)』、60頁、福山学生会事務所編刊、昭和5年7月30日

関連情報1:『福山学生会雑誌(第63号)』、54頁、「常陸嶽理市君」、湯原岩夫(大正10年卒)、福山学生会事務所編刊、昭和元年12月30日

関連情報2:『福山学生会雑誌(第64号)』、54頁、「常陸嶽論」、桑田茂、福山学生会事務所編刊、昭和2年7月20日

関連情報3:『山陽力士伝』、世良正明著、びんご出版刊、1995年12月

2005年5月24日更新:本文●2006年3月2日更新:経歴・本文(深安郡→福山市)●2006年6月9日更新:タイトル・本文●

2006年12月8日更新:レイアウト●2009年7月21日更新:出典・関連情報●